



Title	World Wide Viewsに対する市民参加型アセスメント
Author(s)	山内, 保典; Yamanouchi, Yasunori
Description	報告 小特集 World Wide Views
Citation	科学技術コミュニケーション, 7, 33-48
Issue Date	2010-02
DOI	https://doi.org/10.14943/43265
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/42659
Type	departmental bulletin paper
File Information	JJSC7_004.pdf



報告

World Wide Viewsに対する市民参加型アセスメント

山内保典

Participatory Assessment of World Wide Views

YAMANOUCHI Yasunori

Abstract

Not only technology which natural science offers, but also one which social science offers can be an object of participatory technology assessment (pTA). In this paper, "World Wide Views on Global warming (WWViews)" which is the globe-encompassing democratic deliberation was assessed by citizen participants. The participants of WWViews are little interested in global warming. Therefore, their assessment is useful to develop a participatory method which can involve wider range of public. This paper is based on questionnaire survey and free description which addressed adequacy of information provision and supports for discussion, satisfaction of the WWViews and motivation to participate in other technology assessment. As a result of questionnaire, majority of participants showed a high level of satisfaction with them. Their free descriptions are grouped into five lessons. 1. Avoid the bias. 2. Give consideration to group dynamics. 3. Reduce the anxiety of making remarks. 4. Make the connection between pTA and real life. 5. Focus on satisfaction of participants.

Keywords: participatory technology assessment, citizen participants, World Wide Views, global warming

1. 問題と目的

2009年9月26日, World Wide Views in Japan (以下, WWViews) という, 気候変動に関するグローバルな市民参加型テクノロジーアセスメント (以下, pTA) が開催された. WWViewsホームページ (<http://wwv-japan.net/>) では, 以下のように紹介されている.

WWViewsプロジェクトの中心となるのは「世界の国と地域で同時に開催される世界市民会議」です. ここでは, 各会議100人の市民が, COP15 で交渉される論点のいくつかを討議しつつ自らの見解を形成し, 投票することが予定されています. この世界市民会議は COP15 の政府間交渉, 及び, 今後の世界の気候政策の行方に影響を与える機会を, 市民に提供することを狙いとして開催されるものです. 世界の市民は地球の温暖化の進行だけでなく, 今後の気候政策のもとで生きてゆかなければなりません. これこそが, COP15 において政治的な意思決定者が交渉を行う前に, 市民の意

2010年1月7日受付 2010年1月31日受理

所 属: 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター

連絡先: y.yamanouchi89@gmail.com

見を聞くべきだという本プロジェクトの趣旨です。」

本稿の問題意識は、このWWViewsの理念を社会科学にも適用すること、すなわち、社会科学が社会に提供するpTA手法などの技術も、自然科学が提供する技術と同様に、市民によるアセスメントを受け、その結果を手法開発に反映すべきだということである。

今回のWWViewsの設計は、デンマーク技術委員会を中心とする主催者とそのアドバイザーを中心になされた。しかし、社会科学が提供する参加型手法を利用するのは市民であり、その結果、影響を受けるのも市民である。そうであるならば、社会学者が将来のpTA手法の設計を行なう前に、市民の意見を聞くべきであろう。

そこで本稿では「pTA改善に向けて、何を市民は求めるのか」について、WWViewsの市民参加者を対象にした質問紙調査の結果を題材にして検討する。

WWViewsの参加者を対象とする利点として「pTAを体験した市民の意見を数多く収集できること」があげられる。他のpTA実践と比べて、WWViewsは参加者数が多く、地域・年齢・性別・職種・学歴等のバランスも配慮されている。そのため情報提供、議論サポート、市民会議全体について、多様な参加者の求めるものが幅広く収集できる。

また市民参加者がテーマ（＝気候変動）に、特別な関心や専門知識を持たず、議論への参加経験も乏しい、いわゆる「ふつうの市民」であることもポイントである。pTAを社会に根付かせるためには、ふつうの市民の巻き込みが不可欠である。一方、他のpTA手法の主な参加者は、利害関係者や高い関心を持つ市民である。関心の高い市民とふつうの市民では求めるものが違う可能性がある。ふつうの市民のニーズを取り入れることで、より幅広い市民の積極的参加が見込めるpTA手法を開発することができるだろう。

本稿では、WWViews参加者の意見を整理するため「参加に向けた十分な情報（第1-a段階）や議論サポートの提供（第1-b段階）」が、「今回の市民会議に対する満足度（第2段階）」を高め、そのことにより「将来のpTAへの参加意欲（第3段階）」に結びつくと仮定した。そして、各段階に対する参加者の満足度評価や意見を、段階ごとに記述していくことで、市民参加者の求めるものを示し、改善に向けた指針を示すことを目的とする。

2. 方法

本稿では多様なWWViews参加者の意見を網羅的に収集するために質問紙法を採用した。本稿では「会議前の情報提供」、「WWViews当日の議論」、「WWViews全体」、「将来のpTAへの参加」に関する設問に対する5段階評定の結果と、自由記述を検討対象とする。使用した質問項目に関しては、WWViewsホームページから閲覧可能になる予定である。

WWViewsのリクルーティングを依頼した専門機関を通して、WWViews全参加者に対し、郵送調査を行なった。その結果、105名中94名からの回答が得られた（回収率：90%）。回収率が目立って落ち込んだ属性（男女、年代、職業、既婚率、居住地域、討論グループ）はなかった。参加者の属性の割合も、WWViewsホームページを参考されたい。

3. 結果と考察

3.1 最低限の情報提供はできたのか

WWViewsでは小冊子とビデオで事前の情報提供がなされた。ここでは、小冊子が読まれたのか否か、内容が理解されたのか否か（気候変動の科学的知見、気候変動に関する政治状況、pTAへの

市民参加の意義)を尋ねた。加えて情報提供に関する自由記述も求めた。

3.1.1 情報提供に関する評定結果

小冊子の閲読量について「ほぼ全部読んだ」が47名(50%),「4分の3程度読んだ」が13名(13.8%),「半分程度読んだ」が25名(26.6%),「4分の1程度読んだ」が6名(6.4%),「ほとんど読まなかった」が3名(3.2%)であった。

全部を閲読した者とそれ以外に分けて各理解度をまとめたのが以下の表1である(表では、理解度が高い方から順番に「++」(=非常に理解できた)～「--」(=まったく理解できなかった)と表記。数字は%。表3、表5も同様)。

表1 小冊子の内容の理解度

		++	+	0	-	--
科学的知見	全部閲読者	21.3	63.8	8.5	6.4	0
	全部閲読者以外	6.4	57.4	14.9	19.1	2.1
	全体	13.8	60.6	11.7	12.8	1.1
政治状況	全部閲読者	12.8	70.2	10.6	6.4	0
	全部閲読者以外	6.4	44.7	23.4	19.1	6.4
	全体	9.6	57.4	17.0	12.8	3.2
WWViewsの意義	全部閲読者	19.1	68.1	6.4	6.4	0
	全部閲読者以外	8.5	48.9	25.5	17.0	0
	全体	13.8	58.5	16.0	11.7	0

3.1.2 情報提供に関する自由記述

情報提供に関する自由記述を表2にまとめた。分類に際しては「肯定意見」と「否定意見」が分けられ、否定意見がさらに「媒体や体裁の問題」「文章表現の問題」「内容の問題」「読者の問題」に分けられた。

各分類カテゴリに含まれる発言数は、分析対象から除外した。その理由は、1. 各自由記述の分類カテゴリが一意に決まらないため、2. 発言数の多寡が分類カテゴリの重要性とは比例せず、解釈困難であるためである。また発言を示した表2、表4、表6、表7、表8では、すべての発言は紙面の都合上載せられないが、論点は網羅するように配慮した。

表2 情報提供に関する自由記述

分類	番号	発言例
肯定	表2-1	冊子はわかりやすい言葉で大まかに書いてあって、分かりやすかったと思います。
	表2-2	小冊子は細かく書いてあり、参考になった。
	表2-3	新聞や報道でしか知り得なかった地球温暖化問題に関し、いろいろな観点から知ることができてよかった。
媒体・体裁	表2-4	初めは、冊子になっているので読むことに気が滅入ってしまいそうでしたが、読み始めてみると、スラスラと読むことができました。
	表2-5	資料が読み物だけであつたので理解しづらい。映像が問いであるのなら、資料で見せておくのも良いのではないか。
	表2-6	小冊子を読んで来ていないという人も多数いたし、映像(DVD等)による導入の方が良かったと思います。
	表2-7	絵(図解)やグラフ等を増やしたらもっと読みやすいかも
	表2-8	小冊子は文字が多過ぎ。
	表2-9	小冊子の字が小さ過ぎ。様々な年齢層がいるのだから配慮がいるのでは??
文章表現	表2-10	普段なじみのない言葉が多用されていたので理解するのに時間がかかった。
	表2-11	小冊子がやや専門的で、元の文章が外国語であるためか、遠い出来事であるかのように感じた。
	表2-12	文章が長く難しくあまりわからなかった。
内容	表2-13	一つの意見しかなく、主催者の意図がみえみえである。
	表2-14	内容的に理論が先行している感じで、主婦である私達への実生活への提言が見られなかった。
	表2-15	地球温暖化問題を解決していく事は、とても困難なのは分かりますが、解決方法がすべて未来形やクエストン(?)なので、読んでいるうちに少し気が滅入りました。
読者	表2-16	小冊子やインターネットの問題というよりは、自分がふうんそうなんや、頑張りやと言う感じで、そこからこうするべきやというような意見が浮かばなかった。
	表2-17	自分が思っているより、予想以上に深刻な問題と感じたが、自身も含め、世界的にあまり対策を講じていないと思った。
	表2-18	特に積極的に情報収集しようと考えなかったため、あまり利用しなかった
	表2-19	小冊子である程度理解できたと思うが、特に興味がある事柄ではないので、深い理解には至らなかった。ホームページも参考になりました。

3.1.3 情報提供に関する考察

WWViewsにおける情報提供の目的は、すべての参加者に議論で必要となる最低限の知識を提供することであった。情報提供を、情報インプットの段階と、情報理解の段階に分けて考えると、上述したように小冊子を全部閲読した者が半分にとどまっており、インプット段階に問題があったと

いえる。

表2-17では、情報提供により問題への関心を高めることに成功している。その一方で、表2-18, 19では、関心の低さにより情報提供が失敗している。主催者が「読めば知識が得られる／関心が高まる」情報提供をしても、「知識がない／関心がないから読めない」とインプットに抵抗を感じる参加者がいる(表2-4)。「読むこと」と「関心や知識を持つこと」は、鶏と卵の関係にある。しかし、ふつうの人に対する必要最低限の知識と位置づけるのであれば、知識がない／関心を持たない人でも、一通り目を通したくなるような工夫が求められる。

インプット段階に関する改善として、マンガや写真など親しみがあがり、図解できる媒体(表2-7)や、映像媒体の利用(表2-6)が考えられる。ただし準備コストや、映像の再生機器の手配など新たな問題も生じる。またWWViews当日に会場で上映されたビデオについては、誘導的であるという指摘もある(表7-6)。文章表現に関しては、専門用語の説明だけでなく、学術的な文書や翻訳した文書を持つ独特な言い回しにも配慮が必要である(表2-10, 11)。

一方、内容の理解度に関しては、科学技術をめぐる政治状況の数値が低い(表1)。政治に関する情報は、政治の動きが速いため、学校教育でも取り上げにくく、一度学んでもフォローしないと古くなってしまふ。その点に情報提供の難しさがある。

また理解できた人の割合について、必ずしも同じ人が「科学的知見」「政治状況」「市民参加の意義」をすべて理解できなかったとは限らない。グループに1人でも、どれかを理解していない参加者がいれば、議論の停滞を招く可能性がある(表4-5)。その点で、各項目で10%以上の人が理解していない状況には改善の余地がある。

小冊子を評価する軸は多様であり、達成すべきレベルも様々である。例えば表2-1と表2-2はともに記述のレベルに着目し、高評価を与えながら、内容は正反対になっている。このように情報提供対象者が多様な場合は、知識レベルや関心、読み方により、読者による満足度評価は異なる。

内容面に関する改善として、まずバイアスの問題(表2-13)は、完全に解決することは不可能である。資料の内容と作成プロセスを開示することが現実的な対応となろう。

生活との乖離(表2-14, 表7-13)は、会議の目的とセットで論じる必要がある。今回は政治交渉に影響を与えるため、政治交渉の場で取り上げられる問いが設定され、情報提供もそれに従った。しかし心理学の動機づけに関する知見では、人間の行動は、本人が何らかの要求(欲求)をもち、同時に要求の対象が存在するときに生起すると考えられている。ある問題が自分の生活や信念と関連づけられた場合に、初めてその問題に関する情報に対する要求が生じ、収集する動機づけが高まる。その点で、市民会議で議論する内容を再検討する(表4-27, 28)とともに、自分との関連づけの支援も必要だろう。

政治に影響を与えるという目的を維持したまま、この点を改善するには、3.3節で扱う会議のインパクトとも関連づけて議論する必要がある。もし、この会議に専門家が耳を傾け、政治に反映すれば、生活との結び付きは自ずと強くなるのである。

不確実性に対する困惑(表2-15)は、pTAの意義にも関わるものである。情報提供により不確実性が伝わった点は評価すべきであるが、だからこそ問題解決や意思決定において市民が鍵を握っていることを伝えきれなかった点に問題が残る。

こうした事前の情報提供に加えて、議論の中でなされる情報提供も考慮すべきである。3.2節で示すように、参加者は他の参加者の気候変動に関わる経験や見解に関心を持ち、共感し、議論や意見形成に反映させている。こういったローカルな知識が影響することにより、市民同士の議論に、専門家同士の議論とは異なる価値が生まれる。参加者は自分だけでなく、目の前の他者の生活や経験も考慮して意思決定を行なう。これは上述した生活との乖離の問題の軽減にもつながる。

ただし一般に、議論の場で多く取り上げられるのは、環境の変化に関する気づきや、温暖化対策をしたエピソードである(表4-3)。変化がないこと、対策していないことは、具体例を聴くこともできず、話を広げにくい。偏った情報が議論で多く扱われれば、ますます集団はすでに共有している情報を論じがちになる(Stasse and Titus 1985, 1467-78)ため、意見表明や意思決定における同調圧力(表4-11)も強くなる。

3.2市民同士で議論はできたのか

議論の経験が乏しい市民同士で議論ができたのか、どのような議論のサポートが必要なのかも問題である。以下では「発言の機会」、「他者の発言による気づき」、「素人同士の議論の意義の評価」について質問した結果と、議論に関する自由記述を整理した。

3.2.1 市民同士の議論に関する評価結果

「発言機会」、「他の参加者の意見を聞くことによる新たな発見」、「素人同士の議論の意義」についての評価をまとめたのが表3である。

表3 市民同士の議論に関する評価

	++	+	0	-	--
発言機会の評価	35.1	50.0	8.5	3.2	3.2
他の参加者の意見を聞くことによる、新たな発見の評価	51.1	39.4	5.3	4.3	0
素人同士の議論についての意義の評価	66.0	25.5	5.3	3.2	0

3.2.2 市民同士の議論に関する自由記述

議論の評価をする際に言及された対象により「ファシリテータ」、「グループメンバー」、「運営・会議設計」、「バイアス・制約・誘導」に分類された(表4)。このうち、ファシリテータについては、内容が多岐にわたるため別稿を用意してより詳細に検討する。

表4 市民同士の議論に関する自由記述

分類	番号	発言例
グループメンバー	表4-1	地域別、年齢別、性別のバランスが良かった。
	表4-2	テーブル内のメンバーの構成に偏りがあるように感じた。
	表4-3	都心とは違い、地方に住んでいる人達の方が自然にふれる事が多いので、環境の変化によく気付いている。農業林業漁業養蜂等の仕事に携わっている人達の意見を直に聞いてみたかった。
	表4-4	充実度はグループによるのかなあと感じた(反対意見の人がいたりいなかったり…とか)。
	表4-5	テーマの理解度に個人差があり、全員が統一理解するのに時間をさかれてしまい、本論への意見交換に発展する所まで行かない事があった。
	表4-6	同じグループの方がみなさん優しく、幼稚な私の意見も笑うことなく聞いて頂いたので、意見を述べられたほうだと思います。
	表4-7	ひとり、ひとりの理解度の違いで、意見を言えない時もありました(はずかしいから)。他の参加者の意見を聞くことで、自分の意識レベルが上がりました。
	表4-8	とにかく自分の勉強不足を痛感しました。意見が言えなかったのではなく、何を言っているかわからなかった。
	表4-9	若い方の意見が少なかったことが残念かも。おそらく、上手に言えなかったり、考えてなかった、考えたこともなかったと思います。人生経験の多い年の人の方が、たくさん意見を述べていました。
	表4-10	やっぱりかなり年齢の離れた70代ぐらいの方の意見を聞くのって一苦労だった(話ごととびとびであったり、テーマを外れていたり…)。
	表4-11	他の参加者と全く違う意見を発言する事に勇気がいった。
運営・会議設計	表4-12	項目が多く、時間に追われていて、議論をすることより時間の逆算を考えての中の話し合いで、少々落ち着きに欠けたように思います。
	表4-13	結局時間にしばられているので、つきつめた内容とは思えませんでした。
	表4-14	4つのテーマを議論する前にDVDを見ましたが、その前にもう少しわかりやすい説明があった方が良かったと思う。
	表4-15	まとめに関して自由過ぎ!!(中略)始める前に具体的施策をもちこむように言うとか、例を見せるとかしてほしかったです。
	表4-16	最初から提言を作ることを強く頭に置いて議論したかった。
	表4-17	前日に顔合わせしていたので、楽に話し始められたと思います。
	表4-18	全国から市民が一同に会する意義はコストと比較し意味があるのか。事前に関東、関西とかのブロックでの開催でも意義はあるのでは。
	表4-19	全体での討議や意見を聞くことができたよかった。途中途中でグループのリーダー?のような人が中心になって話を全体で始めたら、また違う方向や、深い意見や、一方向的な新しい提言ができるかも。
バイアス・制約・誘導	表4-20	誰かしらが会話において、テーマ毎において、方向性を示す必要があったと感じた。
	表4-21	グループの進行係によってかなり変わってくるだろうなと思いました。
	表4-22	結論ありきの話で、提言をまとめなければいけないために、最後は少し時間が足りなかった。又、誘導して話をまとめていった感があった。
	表4-23	道標の多い路を、その通りに歩かされた感想。寄道をしたかった。
	表4-24	いくつかのテーマとその回答が4つくらいあり、選択制になっていたのが選びやすかった。初めてのことでだったので、やりやすかったと思います。
	表4-25	4択の内容にゆがみがある。無理矢理に決めなければいけない。
	表4-26	議論を進める上で、小冊子やDVDの情報がたたき台となるのですが、「素人」同士の会議なので何らかのたたき台は必要だと思う反面、議論がたたき台にまとめられてしまう危惧も感じていました。
	表4-27	科学的で客観的な意見もさることながら、違った主観的な意見の主張を聞いて議論するような部分ももっとあっても良かったかと思っています。
	表4-28	温室効果ガスを少なくする為に市民は何をすればよいのか具体的な意見を言いたかった。また聞きたかった。→温室効果マネーとして。
	表4-29	「素人」同士ということで、高校レベルの授業での知識やニュースなどの情報を、どの程度話すのが「素人」なのかを考えてしまい、自分の考えを抑えていた部分もありました。

3.2.3 市民同士の議論に関する考察

市民同士で議論する意義について、91.5%が肯定的に評価しており、同じく発言機会(85.1%)や新たな発見(90.5%)も認められている(表3)。これらの結果からは、参加者の実感としては、議論ができ、議論をした意義もあったといえる。

議論の満足度や参加意欲を高めるために、参加者の多様性(表4-1, 3)、十分な時間(表4-12, 13)、制約の排除(表4-22, 23, 25, 26)、市民であることを活かせる(表4-27, 28)が望まれていると考えられる。このうち時間設定については、3.3節で満足感と関連させて扱う。

参加者の多様性について、地域、年齢、性別に配慮しグループは分けられたが(表4-1)、それでも偏りを感じた人もいた(表4-2)。例えば表4-4では、反対意見を持つ人の配置など、環境問題に対する態度への配慮も期待されている。集団意思決定に関する研究では、討議前に個々人の持っていた判断や態度などが、集団での討議を通して、集団として極端になる「集団極性化」(Myers, D.G. and Lamm, H. 1976, 602-27)という現象も知られており、pTAの設計では可能な限り、態度等の多様性にも考慮する必要がある。

また参加者の多様性は議論を難しくする(表4-5, 7, 9, 10, 11)。こうした難しい議論が成功した要因として、参加者はファシリテータと参加メンバー(表4-6)をあげている。その一方で、この両者が議論を歪ませる危険性も感じている(表4-11, 21)。市民同士の議論は良くも悪くも、ファシリテータも含めた参加メンバーの影響を受けやすい。改善に向けて、リーダーシップ、メンバー間の集団力学、社会的促進/抑制など、社会心理学の知見が有益だろう。

一部の参加者は、他者と自分を比べ、発言を躊躇している(表4-7, 8)。これを解決する要因の1つがメンバーの人柄、特に耳を傾ける行動である(表4-6)。議論における「聴くこと」の意義は、改めて強調すべきである。

また「理解度が違うため、恥ずかしくて発言できない」という考え(表4-7)は、自分の理解の低さが露呈する場面において、自尊心を守り、維持し高めるため、発言を避けるという自己高揚動機¹⁾に基づいた行動として説明できる。相対的な理解度の低さが、恥の感覚につながるとすれば、相対的に理解度の高い専門家がいる状況においては、自分の意見をいって恥をかくより、質問役や聞き役に徹しようとする人が増える可能性がある。

逆に言えば、全員が同程度の理解度をもつ非専門家同士だったからこそ、議論に参加できた人もいるだろう。参加者の中には、素人同士の議論の限界を指摘する意見がある(表6-24, 表8-26)。しかし、上記の考え方によれば、素人同士だからこそできる議論もあり、そこでは専門家の前では恥ずかしく言えない意見も出てくるといった強みがある。

議論の参加者によって、議論は異なる意義を持つ。WWViewsのような素人同士の会議を開催する意義の1つは、非専門家の潜在的な意見を顕在化できることである。その点でWWViewsにおいて、世界共通手法という制約があり、参加者の個々の発言を記録し、共有できなかったことは反省すべき点である。ただし、記録されることへの抵抗感(表7-4, 5)や観察されることによる影響には配慮が必要である。

バイアスや制約を問題視する意見が多い中で、明確な教示(表4-14, 15)や方向付けを求める意見(表4-16, 20, 24)もあった。たしかに議論の経験が浅い者にとって議論の枠がないことは、困惑を招き、議論ができなくなる原因になりえる。一方で、説明を多くしたり、形式を制限したりすれば、議論内容にも影響を与えるだろう。介入をして何らかの方向性に引っ張る危険性と、介入せずに議論をできなくしてしまう危険性ととのバランスをとることが求められる。

市民が「市民らしい」内容の議論を求めている一方で、「市民らしさ」「素人らしさ」を演じていた可能性が示唆された(表4-29)。これは市民会議を開催する意義をも問い直すポイントである。運

営側の市民に対する期待を感じた可能性や、自分は日本の市民であるという意識が強まり、その集団の認知や行動の特徴が強調された可能性がある。自分を何者と位置づけて議論に参加しているのか、その何者がどのように振る舞うべきだと考えているのかなど、追跡調査が必要である。

3.3満足できる市民会議だったのか

満足できる市民会議だったのか否かは、参加への動機づけを向上させる上で重要な評価である。以下では、提言に関する評価と市民会議全体に対する評価、そのように評価した理由に関する自由記述を整理した。

3.3.1 市民会議の満足度に関する評定結果

WWViews参加による負担感について、「まったく負担ではなかった」(50.0%),「あまり負担ではなかった」(36.2%),「どちらともいえない」(7.4%),「やや負担だった」(6.4%)であった。

「自身のグループの提言内容」「会場全体の提言内容」「WWViews全体」についての満足度を表5にまとめた。

表5 市民会議の満足度

	++	+	0	-	--
自身のグループの提言内容についての満足度	41.5	40.4	11.7	4.3	2.1
会場全体の提言内容についての満足度	27.7	38.3	19.1	13.8	1.1
WWViews 全体の満足度	54.3	39.4	6.4	0	0

3.3.2 市民会議の満足度に関する自由記述

【提言に関する満足度】

提言に関して、「提言作成」、「提言評価」、「提言内容」に分けて、満足度の評価に関する意見を整理したのが表6である。

表6 提言に関する自由記述

分類	番号	発言例
提言作成	表6-1	何をどう言っていていかならない事が多く、むずかしかった。言葉を文章に表すのが困難だった。
	表6-2	グループで提言をまとめるのは、一人で考えてしまう事より大変な事ですが、まとめる時間が足りない感じでしたが、その中でも良くまとまったと思います。
	表6-3	最後にグループみんなで1つのこと(提言を作ったこと)ができて楽しかったです。
	表6-4	提言を何十字以内で時間内で作るという最終目的が無意味だと感じました。
	表6-5	この提言は重要なものだと思うので、もう少し時間をかけてもよかったのではと思います。
	表6-6	提言したい事は山ほどあるので、文字数に限りがあると十分に伝えられない事があり、きちんと正確に伝える為にはもう少し説明ができる様な提言書を作成したいと思いました。
	表6-7	提言リストは大体みんな同じ意見になったと思う。まとめの時、私達のグループはとても時間を気にしていたが、時間を過ぎてからの発表テーブルも多々あった事にやや不満であった。
提言評価	表6-8	なぜこの提言になったのかの発表があっても良かったと思う
	表6-9	私共の提言も良かったと思いましたが、会場全体で選ぶのも良いと思いますが…。先生方の評価もはいつたのでしょうか？
	表6-10	自分たちの提言が一番選ばれて良かったです。
	表6-11	提言リスト作成作業全体が楽しく、一体感があり、皆の意見をリーダーが引き出していただき決選投票ですごく盛り上がり、3位に成り満足です。
提言内容	表6-12	1位票を獲得した提言タイトルは良いと思った。子供から、年配の方々にもわかりやすい提言が世界でも評価されるのではないのでしょうか？
	表6-13	自分の感じたことはすべて詰まったと思う。
	表6-14	提言はグループごとに個性があつてよかったと思います。
	表6-15	自分の意見も、グループの意見も少しづつ入った、いい提言ができたと思う。
	表6-16	自分たちが選ばれて満足していますが、他の2点と自分の意見(求めるもの)が違い、やや不満が残りました。
	表6-17	提言の具体的さや独創的な意見がなく、提言はスローガンにしかならなかったことと、具体的な行動のプランが作り出せなかったことが自分が不十分だった。意見に具体的さを生むのが難しかった。
	表6-18	提言は標語ではなく、もっと具体的なものに仕上げたかった(クリーンエネルギーの普及を最優先にすべき、など)。せっかく市民がいま必要だと思うことについて議論して、考えもまとまったのに、どこでも言われているような標語を提言してもあまり意味がないと思う。
	表6-19	日本の提言は、世界に出すのが恥ずかしい出来でした。
	表6-20	提言は、私共のテーブルの意見とほぼ同じでした。皆目標に考えている事が確認できました。日本より他国の方が問題有としましたが…。
	表6-21	阪大の小林さんがNHKのTV番組の中でおっしゃっていた(と思う)のですが、日本の提言は良く言えばソフト、悪く言えば訴えるものがないように見受けられます。ストレートでわかりやすいと思うのはモザンビーク、ベルギー、チリといったところでしょうか。各国の提言はお国柄(?)が出ていて大変興味深いですね。
	表6-22	採用された提言が、なんだかキャッチコピーのような軽さで、残念でした。
	表6-23	提言には具体性が必要だと思いますが、選ばれた3つはキャッチフレーズ的なものだったような気がします。提言が具体的にならなかった一つの原因として、日本人である私達にとって、この環境問題はまだまだどこか遠い問題という意識があるのではと思います。つまり、会議ではそこまでの切実さを共通認識とできなかったということかかと思えます。
表6-24	全体的に専門知識に欠ける素人集団だったので、この時点ではこんな結果しかうまれないと思う。出来れば、もう一歩踏み込んだ討論をし、それなりの結果が出せれば良かったと反省しています。	

【市民会議に関する満足度】

市民会議全体に関する意見を「運営への注文」、「企画」、「参加者の多様性」に分類したのが表7である。

表7 市民会議に関する自由記述

分類	番号	発言例
運営への注文	表7-1	もう少しいろんな意見(資料にない意見)を聞くような姿勢がほしい。
	表7-2	ホテル会場等ムダ使いすぎ。エコとは遠いイベントと感じた。
	表7-3	環境問題の大きい会議で気持ちのテンションも清々しく上っていましたのに、夕食のメニュー、ビックリする程安易な内容でした。レトルト系、冷凍系、揚げ物が多く、会議の主旨と違うだろう…。カレー、丼物、一品の方がまだ良い。環境=食です。
	表7-4	市民参加は大いに結構ですが、直ぐ後ろにおられる事は少々抵抗がありました。素人は記録係の人も気になるものです。
	表7-5	マスコミ取材の程度がわからなかったが、かなりの密着取材だったのでとどまった(NHK)。事前に取材は受けても良いとは言ってなかったので、できれば受けても良い方だけでグループを作る等配慮がほしかった。
	表7-6	申し訳ありませんが、ただの大学生のパフォーマンスにしか思えませんでした。本来に社会的意識決定への市民参加できたとは、まったく思いませんでした。答えはビデオで導かれていた。時間内で作る事は意味がない。
	表7-7	結果ありきの会議にこのような時間が必要かどうかと思いました。とても楽しい時間でしたが。
	表7-8	できれば同時にやっている他の国の会議等とWebカメラ等を使ったSkypeの様な物で雰囲気等が見られれば良かった(希望です)。
	表7-9	事前に専門家同士の反対意見と反対意見を討論してもらい、それにディベート形式で一般人が参加し、賛成反対派に分かれ、意見を交わす方法をとった方が良いと思いました。
	表7-10	参加者全員の意識(気候変動に対する)は変わったと思う。でも関係者、参加者だけではダメ。もっと社会全体に。
	表7-11	市民会議(WWV)をインターネット配信だけでなく、多様なところで情報を発信し、それを発信だけでなく反映させていける様にすべきである。
	表7-12	多くの市民が世代を交えて意見をかわすことは、ある意味初の試みであったのではないか。その点評価できる。
	表7-13	私達が一番身近なことで、今何ができるのか?高いお金をかけずにすぐ協力できる事が話しの中になかった。また、排出量削減は具体的に何をどうしたらいいのか。数字だけではわからないので、説明がほしかった。
	表7-14	現在の政治に反映されるかが心配である。
	表7-15	1年ごとに環境が変わり、長期展望ではなく短期展望の解決がもとめられるため、1年ごとの会議が必要だと思います。
	表7-16	国民1人1人の意識を高めるためには、継続的な開催が必要。
企画	表7-17	年代も性別も配慮されており、尚かつ世界同時進行ということもあり、大きなイベントに参画できている感があった。
	表7-18	自分が会議に参加したことに意義があると感じる。
	表7-19	このような会議に出席することは、今までも、これからもないことだと思うので、貴重な経験になった。参加できたことに感謝したい。
参加者の多様性	表7-20	年齢、出身地、性別が異なる人々が、全く面識のない状況で討論できたことは、感動に値する。
	表7-21	地域別年代別を各テーブルに配置され、地域差、年代差の意見が確認でき、20代参加者の意見に将来性を感じられ、日本の若い者にもしっかりした考えを持っているのに感心しました。
	表7-22	環境について考えるいい機会を得られたこと、初対面の方々とのテーマについて話をするよい機会であったこと。貴重でした。
	表7-23	初めて会った方々とどういった話し合いがなされるのか心配でしたが、皆さん同じ様に疑問を持っているという事が分かり、また私達がすべき事や知るべき事が明確化されて良かったと思います。
	表7-24	参加者の中には、何の為に参加したのか、理由がわからない人がいると思われた。
表7-25	参加者の知識が低すぎる。なので、あまり討論にならなかった。	

3.3.3 市民会議の満足度に関する考察

全体として負担感は低く、満足度は高い(表5)。参加者の実感としては、提言や市民会議は成功し、満足度のいくものであったといえる。ただし、自グループの提言に比べ、日本全体の提言に対しては満足度が低い。この結果は、後述するように提言を評価する視点として「発言者の視点」と「評価者の視点」が存在することに起因すると考えられる。

提言について検討する(表6)。提言作成は、そのプロセスは充実感を伴うものであったが(表6-3)、文章化や協働という点で、一般的に困難な課題でもあった(表6-1, 2)。とりわけ、字数と時間の制限が問題にされた(表6-4, 5, 6, 7)。表6-6で顕著なように、これらの不満は提言をしたという気持ちの高まりから生じるものであり、市民参加への意欲向上という点での成功を示唆するものである。一方で、表6-4のように、その気持ちが満たされなければ会議全体の否定にもつながる。改善案としては、会議終了後に個人からの提案を受け付け、報告書に掲載するなど、会議の制約で表現しきれなかった気持ちも収集する仕組みが考えられる。ただし、どの程度の時間や字数があれば、満足度のいく文章化や協働ができたのかは明らかでない。この点については、認知心理学や社会心理学の知見を踏まえ、別途、実験的に検討する必要があるだろう。

提言評価に関して、WWViewsでは模造紙に書かれた各グループの提言を、参加者が見て回って、上位3つに投票する形で行なわれた。閲覧時間に限りがあり、1つ1つを吟味する時間は必ずしも十分ではなかった。そのことが説明の要求(表6-8)や、分かりやすい提言への高評価(表6-12)につながった可能性がある。提言の順位付けは、主催者側の結果の整理を簡易化すると同時に、会場を盛り上げるためになされた。たしかに、参加者たちは盛り上がったが(表6-10, 11)、提言が選ばれなかったグループから評価に対する意見が出される(表6-9)など不満も残した。またキャッチコピー的な表現(表6-22)は、会場での投票を意識して用いられた可能性もあり、順位づけが提言の性質を歪めた可能性がある。会議設計に順位づけを持ち込む際には、功罪を吟味する必要がある。

提言内容を評価する軸の1つは、発言者の視点に立ったものである。すなわち、各参加者や各グループの伝えたいことが、表現できたか否かで評価するものである(表6-13, 14, 15, 16)。もう1つの軸は、評価者の視点に立ったものである。すなわち、第三者的な立場から、国際的な比較や政策提言としての有効性という観点で評価するものである(表6-17, 18, 19, 21)。後者の視点では、独創性や具体性の欠如が問題とされている。ただし、国際的に比較しても日本の方が優れているという意見もある(表6-12, 20)。「独創性のなさ=誰もが分かり、共有できる」、「具体性のなさ=網羅的、理念的」など、認識にずれがあると考えられる。

後者の客観的な視点が適用されたのは、提言や結果が国際的に比較可能な状態で並べられたことに由来する可能性が高い。社会的意思決定では、自分も含めた様々な立場の見解を客観的に把握し、合意を形成することが求められる。WWViewsのような比較可能な結果の提供には、各意見の客観的な把握をサポートする効果が期待できる。

上記2つの評価視点のうち、どちらを採用し、手法の改善や開発に結びつけるのかは、手法の目的に依存する。目的が、参加に伴う満足感やメンバーの一体感であれば前者、提言の社会的インパクトであれば後者であろう。いずれにせよ、参加した市民にとって、発言やその結果が誠実に扱われ、社会的承認を得ることは、今後の参加意欲の支えになる(表8-23)。提言の具体性や独創性の欠如を反省する市民参加者もおり(表6-23, 24)、こういった反省を生かせる仕組みを作っていく必要がある。

次にWWViews全体の満足度を考える(表7)。運営に対して様々な意見や注文が寄せられており、評価ポイントが多様であることが分かる。表7-2, 3からは、WWViewsがエコイベントと認識さ

れていたことが分かる。気候変動を議論すべきテーマとして取り上げた時点で、会議自体がメッセージ性を帯びることは避けられない。しかし表7-6, 7のような反応が出るほど、意図せざるメッセージが出ていたとすれば、会議全体の意義はなくなる。参加者がどこで「結論ありき」と感じたのか、再検証をする必要がある。

表7-8, 9は、全世界で共通の手法を用いることを前提とするWWViewsでは実現困難だが、こうした意見を反映する形で、市民参加で市民型手法を開発・実施するというサイクルを生み出すことが、ふつうの市民の巻き込みには有効だろう。

表7-11, 14は参加を通して「社会にインパクトを与えたい」、「この活動を社会に認めて欲しい」という気持ちが生まれた証拠でもある。市民の意見に耳を傾ける専門家や政治家を巻き込むことが、この参加者の要望をかなえることになり、更なる市民の巻き込みにつながる。こうした正のスパイラルを生み出せるか、逆の負のスパイラルに陥るか。実践だけでなく、その結果の報告がカギを握る。同時に社会全体の中でpTAの認知度を上げるには、継続的な実施(表7-15, 16)も必要である。

企画自体に関して、大規模で画期的な企画に、ふつうの市民である自分が参加できたことに満足を感じていた(表7-17, 18)。参加者の中には、pTAを一生に一度参加できるかどうかの会議と捉えている人もいる(表7-19)。参加者の会議に対する期待感や、そこで受ける印象のインパクトは、pTAの実践家の想像以上に大きい可能性がある。この感覚の違いは意識しておく価値がある。

多様な参加者と出会い、議論し、新たに発見をしたことも、満足感をもたらした(表7-12, 20, 21, 22, 23)。一方で、参加者に対する批判も見られた(表7-24, 25)。多様な参加者との交流については3.4節で改めて触れる。

3.4 今後、参加する意思は高まったのか

3.4.1 参加意思に関する評価結果

「今後の参加意向」では、「非常にそう思う」(43.6%)、「ややそう思う」(42.6%)、「どちらともいえない」(12.8%)、「あまりそう思わない」(1.1%)、「まったくそう思わない」(0%)との概ね肯定する結果が得られた。

3.4.2 参加意思に関する自由記述

参加をするか否かを判断する理由は、「交流を通じた学び」、「経験の楽しみ」、「意思決定への参加」、「問題解決への貢献」に分類された(表8)。

表8 参加意思に関する自由記述

分類	番号	発言例
交流を通じた学び	表8-1	たくさんの方の異なる意見を伺い、自分自身の見聞も広くなったため
	表8-2	あまりにも自分自身知らない事、分からない事が多いと気付きました。
	表8-3	自分があまり関心のなかった環境問題について、こんなに熱く語れるのかと、新しい気づきがあったから。
	表8-4	普段から色々感じていても、それを言い合える場がないし、こういう場に参加する事によって、自分の思っている事や社会的意思決定に関する問題などが明確に把握できるので、是非参加したいです。
	表8-5	自分の枠の中だけでは、なかなか見つからない違った考え方の人と意見を交換することで、視野が広がるから。
	表8-6	知らなかった世界をのぞき、知らなかった人達の考えを聞き、又自分も話す。混乱しながらも、話の的をしぼってゆく訓練をもっと多くしたいと思うから。日本人は、特に地方の人は、なかなかまだまだです。
	表8-7	日々の行動に対して疑問を持つことができる。
	表8-8	世界の気候変動がおかしくなっているので、テレビ報道以外に直接専門家の話が聞けて勉強に成るからです。
	表8-9	様々な職種地域年代の人々との交流の場であり、自分自身をふり返る場でもあり、たくさんの意見を交換し、学びの場でもあるから。
楽しみ	表8-10	久しぶりに充実した時を過ごせたように思えたから。
	表8-11	いろいろな世代、地域、人生の人と話すことが楽しいから。
	表8-12	この会議以後の動向を見守っていききたいから。
	表8-13	社会の動きに興味があるから
	表8-14	テーマによると思います。今回の経験は活かされるように思います。
意思決定への参加	表8-15	本来、政治、経済は民主的に行われるのが理想であり、そうすることで多くの紛争、貧困、不平等の解消へとつながっていくと思います。それに主体的に関われるものなら関わりたいと思います。
	表8-16	一人の人間として、当然、人に未来を奪われたくないから
	表8-17	一部の専門家、政治家だけで決定するのは、どうしても特権階級(例えば)の判断、視線に偏りがちになると思う。
	表8-18	普通の人々の声として、正しく反映されるのなら、とても素晴らしいことだから。
	表8-19	一個人の意見でも手段方法によって社会に反映させる事ができると思った。
	表8-20	自分の意見を発言する事の意味と重要性に気付いたから。
	表8-21	決定が反映されるとは限らないから
問題解決への貢献	表8-22	自分の行動で変わる事柄があるなら、役に立ちたいから
	表8-23	自分が考えた意見を専門家に聞いてもらえると思うと、人格を認めてもらった感じがするから。
	表8-24	問題意識を多くの人が共有することが出来る場所であるから。
	表8-25	もっと政治家や専門家と市民のギャップを埋めていくべき。知恵や知識を下ろし、経験や実態を伝え、理解し合わないと思力がつかないと思う。
	表8-26	市民参加も良かったのですが、政治家の意見と専門家の意見も聞いてみたかった。一緒になって考える、議論し合える場を設けていただけなら良かったのではないかと思います。
	表8-27	正確な情報を提供して、次世代に継続させていきたい。
	表8-28	帰ってからの友人の反応がとても真剣でしたので。皆で努力しなければとの声があり私は大変嬉しく思いました。
	表8-29	政府主導で行うにしても、個々のレベルでの参加が不可欠であり、まずは一人でコツコツと行動するしかないのでは…。
	表8-30	共感するより、自分(家族)で具体的に行動する派なので。
	表8-31	簡単に休めたら(仕事)どんどん参加してみたいが、休むことが難しいので参加したいが日程が難しく思う。
本人の要因	表8-32	長時間にわたる会議は、体力、気力の持続ができないと思うのであまり参加したくない。
	表8-33	参加したいと思う気持ちは少しあるが、責任が重く感じる。
	表8-34	今回の会議で意見をあまり言えなかったから。
	表8-35	自分の意見がどこまで決定できるのか?もっと理解度を高めてから参加できるような人になってから参加したほうがいいのか?自分の無知さでご迷惑をかけるので…

3.4.3 参加意思に関する考察

評定結果を見る限り「pTAプロセスに積極的でない非専門家に対し、参加するルートを提供し、参加することに対する肯定的な態度を持ってもらう」という点で、WWViewの意義を認められるだろう。

今後の参加を肯定する割合が高いことから、自由記述には参加する理由が多く書かれた。参加者がpTAに参加する理由や参加に感じる意義は様々であり、必ずしも主催者や第三者が狙ったものとは合致しない(表8)。こうした参加者の視点に立ったpTAの魅力在设计に組み込むことで、pTAはより社会に根付きやすくなるだろう。

交流を通じた学びとして、見聞の広がり(表8-1, 8)、自己発見(表8-2, 3, 4)、思考の広がりや深まり(表8-5, 7)、議論の訓練(表8-6)があげられた。同時に、交流は楽しみでもある(表8-11)。これらは運営側からすれば付加的な効果かもしれないが、参加者にとっては直接自分に還元される効果である。ふつうの市民を巻き込むには、こうしたベネフィットを示すことも必要である。協働学習の理論を援用して、これらの効果も高めれば、双方が満足できるpTAの設計が可能となるだろう。

議論自体(表8-10)、WWViewsの今後(表8-12)、社会(表8-13)、環境問題(表8-14)などの要素に関心を持ち、それぞれを楽しむために参加を望む人もいる。

社会的意思決定への参加や、社会的問題解決への貢献に意義を感じて、次の参加を希望する参加者もいる。特にWWViewsという手段を知り、自分の意見を反映させる可能性(表8-19)や発言する意義(表8-20)を感じた参加者がいたことは、WWViewsによる直接の参加意欲の変化であり評価に値する。このような変化を捉え、1つのpTAへの参加を、次のpTAへの参加につなげる工夫が求められる。その点で参加者の満足度を上げ、リピート率を上げるとともに、表8-27, 28のような、自らが教育者や口コミの発信源になる参加者を支援することも必要だろう。

一方で、参加に否定的な意向を示す理由として、影響力を疑問視する意見(表8-21)、行動を重視する意見(表8-29, 30)が見られた。費用対効果(表4-18, 表7-2)やバイアス(表7-6, 7)の問題を含めて説明をしていく必要がある。

また参加する際の個人的な障壁もあげられた。前述したように議論の時間が足りないとする意見が多いが、表8-32のような意見もあり、時間を長くすることは利点と欠点を十分に考慮すべきである。表8-33, 35は、pTAで出される意見を社会でどう扱うかに関わる問題である。ここで指摘されている市民の責任、市民の決定権、意思決定への参加条件などは、議論だけでも、実践だけでも決定できない。これからの実践と議論を通して、社会における位置づけが決まっていくだろう。

4. 総合考察

最後に、市民参加者から、より多様で考えられた意見を引き出し、社会全体で学ぶためのpTA設計について、本稿から得られる教訓をまとめる。

1. バイアスへの配慮

参加者は、提供された情報、イベント自体、ファシリテータが持つバイアスに敏感であり、それらに反応する。それらの要素の誘導やバイアスには注意が必要であり、そのチェックに市民の協力を得ることも視野に入れるべきである。WWViewsでも市民を対象に、フォーカスグループインタビューを会議の半年前に実施している。一方で、ある程度の枠や方向づけがなければ議論ができない可能性も示唆されている。

2. 同調行動を防ぐ

参加者は、議論メンバーの影響を受けやすく、議論の中での同調行動に注意が必要である。特に問題への関心が低く、自分の確固とした意見がない場合には、集団規範の影響を受けやすい。また参加者が「市民らしさ」を意識し、本人が持つ市民ステレオタイプの行動規範に同調する可能性もある。同調圧力は違う意見をいう人がいれば低下する。反対意見を促したり、示したりするなど工夫が必要である。また議論メンバーによる影響を受けないで、個人で考えられる時間を適宜設定することも有効である。

3. 発言障壁の軽減

一部の参加者は、自分の意見の価値を低く見積もり、発言を控えている。こうした発言障壁を軽減するには、どの意見も尊重される場であることを実感させる必要がある。そのために「聴くこと」は有効な工夫である。特に専門家に聴きいられ、社会に反映される実感もてることが参加意欲につながっている。こうして引き出される率直な発言こそが市民同士による議論の強みであるため、記録することによる発言への影響には配慮した上で、参加者の協力を得られる場合には記録をすることが望ましい。

4. 日常生活との関連づけのサポート

議論と日常生活が乖離すれば、議論への動機づけを保ちにくい。一方で、個人的な利害がある問題に対しては、人はその議論に注意を向け、意識的に考える可能性が高い。情報提供や設問で日常感覚を持ち込み、議論テーマと日常生活との関連づけをサポートし、議論の中でも自分と似た立場の他者の経験を聴くことが有効だと考えられる。

5. 参加者の満足度の重視

pTAを社会に定着させるためには、参加者の満足度は重要である。なぜなら満足した参加者は、リピーターとして類似した会議に参加する可能性が高まり、他人への推奨行動もとるからである。また目に見えない広義のサービスを市民に提供するのであれば、交流の楽しさや自己研鑽といった参加者のベネフィット、会議結果の社会へのアウトプットの方法などを、できるかぎり具体的に示す必要がある。会議設計の段階において、参加者の貴重な生活時間を割いて頂くことを忘れてはならない。

調査で示された市民から見たpTAの問題点は多岐にわたる。pTA手法の改善にこれらの意見を取り込むことで、間接的にはあるが、市民も参加した手法開発になるだろう。本稿が「pTA手法に対するpTA」の一例として、今後のpTAの設計に反映され、さらに社会にpTAを根づかせる一助となれば幸いである。

注

- 1) 有斐閣の心理学辞典によれば、自己や自尊感情にとって肯定的な意味をもつように現象を解釈・説明し、そのような意味を持つ情報を収集しようとする個人の傾向をさす。

●文献

Myers, D. G. and Lamm, H. 1976: "The Group Polarization Phenomenon", *Psychological Bulletin*, 83(4), 602-27.

Stasser, G., and Titus, W. 1985: "Pooling of Unshared Information in Group Decision Making: Biased Information Sampling During Discussion". *Journal of Personality and Social Psychology*, 48(6), 1467-78.